

台湾

台湾からの一引揚げ者の感懐

福岡県 大久保 三郎

終戦を迎えたのは台中市郊外の大雅の街に駐屯していたときである。敵上陸に備え、学徒部隊の機関銃中隊で、

私は中隊副官の任に当たっていた。中隊関係の書類の整理をすませ、台北の衛戍司令部に提出して、九月三日復員、勤務先の台中師範学校に帰還して再び教壇に立つ身となった。しかし前途の見通しは立たず流言蜚語に不安な日が続いたが、台湾島民の良識はやがてそれらを霧消してくれた。十一月十五日、学校は中国側に接收され、我々日本人教師全員留用、引続き教育に専念することを

申し渡された。給与は、翌年三月分まで日本側から九月に全額支給済であるので改めて支払わないが、物価高騰のことゆえ当分飯米手当として月額家族特には五百円支給するとの温情が示された。しかし本国送還の目途は立たない不安から、自活の道をもとめて、勤務の寸暇を荷役作業や手慣れた謄写印刷で夜半まで頑張ったものである。

待ちに待った本国送還の達示は昭和二十一年三月下旬、慌ただしく引揚準備にかかる。布団包みと行李、あとは衣類をリュックにまとめ、他の家財一切はすべて残しての引揚げ、台中駅に向う間の沿道は、引揚げ者の列を見送る台中市民で埋まった。そこに日本統治五十年の成果を見る思いがして感慨一入だった。

三月三十一日鹿兒島上陸、老父母待つ故郷の田舎家に

親子五人無事たどりついたのは四月二日だった。日頃父母と妹の三人住いのところに黒崎から強制疎開の兄達家族五人が一年前から同居、それに八月の空襲で焼け出された姉が親子三人で帰り、それに今度私達五人が引揚げた来たので一挙に十六人。

五月私の勤務が八幡の花尾国民学校ときまり、幸い姉の持家の借家があいてそこに私達は移り住んだ。六畳と二畳の二間の古家だが家賃いらず、大助かりである。ヤミ米一升百二十四の時代、学校の給料は私の前歴考慮で破格だという九十八円、もちろん生計は成り立たない。台湾から持って帰った五千円はたちまちの中になくなってしまった。私の通勤用の服などは引揚者に支給された軍服や軍靴で間に合ったが、食べ盛りの子供達をかかえて四苦八苦のさまは誰もが経験したことで変りはないだろう。今でも思い出されるのは日曜日や休みの折に、にわか作業員として日雇い道路仕事をしたこと、夏休みには無理に頼んで製鉄所構内の石炭仲仕の作業、馴れない作業とはいえ、女の人にも及ばない作業量、四十五円の日給が有難いやらなさないやら、無理がたたってマラ

リヤ発熱に悩まされたこともしばしばであった。石けんも手に入らない状況から子供達の下着にシラミがわき、熱湯でシラミ退治をしたこと、たまに手に入ったさつまいもを貴重品のように親子して分けて食べたこと、今から考えれば夢のような話の連続だった。それもこれも敗戦国の国民の当然忍ばねばならなかった神の試練だったかも知れない。

涙は消えず、台南よ

宮城県 小島 平一郎

私は台湾鉄道の機関士として、戦時中は、軍需品、出征軍人臨時列車等の輸送に活躍してきたが、昭和十八年第二回目の召集を受け、台南第四部隊に入隊した。昭和十八年十二月二十五日、いよいよ南方第一線に出征することになる。

私は南方の最前線、海第八九四三部隊が警備するチモール島に派遣された。チモール島とは、ニューギニア